

聖杯戦争 in 総武高校

Iタク

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

願いを叶えるため、理性の化け物は聖杯戦争に挑む。

息抜きに投稿しました。ただ八幡とサーヴァントが一緒の作品を作りたいただけなのでクオリティは期待しないでください…。

目次

プロローグ

始まり、そして召喚

黒装束と白衣

聖杯戦争開始前 他のマスターたちは……

1回戦

6日目

7日目 決戦日

2回戦

久しぶりの……

1

10

21

29

39

50

プロローグ 始まり、そして召喚

いつもの日常。

そう呼べるような俺の生活は、高校二年になってから大きく変わった。つつあった。

自慢じゃないが、友達の数の少なさで言えば学校でもトップを争うほど少ない。というかない。はいホントに自慢じゃないですね。

そうなると当然、人との縁などこれっぽっちもなかった。そう、なかったのだ。

過去形になった要因はやはり入学式当日に起こった事故だろう。道路に飛び出した犬をかばい、高校生活初日から入院する羽目になった。この時点で高校でもボツチが確定したかと思っていたが、高校二年生の現在、本来かかわることがなかったであろう美少女三人と同じ教室にいる。

「……紅茶、冷めないうちにどうぞ?」

「おっおお……ありがとよ。」

紅茶を入れてくれた向かいの席に座っているのは雪ノ下雪乃。奉仕部部长であり、校内一の美少女とも評されている帰国子女。もうとんだけ凄い肩書きがあるんだってくらいあるので今回はこの辺にしておこう。

「相変わらずゆきのんの紅茶はおいしいね!何杯でもいけるよー!」

「あ、ありがとう……でも流石に飲みすぎよ由比ヶ浜さん。」

雪ノ下雪乃の隣に座っているのは由比ヶ浜結衣。俺と同じクラスで、スクールカースト上位に所属してる。容姿は雪ノ下に劣らないほどの美少女であり、また雪ノ下と対極の明るい性格で周りの人からも評判がいい。何より男子の目線を引き寄せる大きなむ……何でもない何でもない。

「雪ノ下先輩、私にもくださいよ。」

「別にいいけれど……あなた、当然のようにいるのね……」

由比ヶ浜の向かいの席、本来であれば相談者が座る席の座っているのは一色いろは。一つ下の後輩であり現在生徒会長をしているゆるふわ系美少女。一言で表すなら、あざとい。これに限る。それにしても、

「いや、ホントになんで毎回いるんだよお前……」

「えー？でもお、私がいて先輩いつも喜んでるじゃないですかあ〜」

「いや喜んでないから。あとあざとい。」

ホントにこいつは部員でも何でもないのだが、不思議とここにいることが当たり前になっている。拗ねたように「ぶーぶー」言ってる何をやっててもあざとくなる後輩を適当にあしらった。

ちなみに俺の席は他三人とは離れたところに位置している。美少女たちの近くに座りたいか、と聞かれたら即答でNOと答えるだろう。彼女らのことを何とも思っていないわけではない。単純にこの席が気に入っているのだ。

一番離れているということは、全体を見渡せる。ただそれだけで、彼女らが何の気兼ねなく会話しているところを見ているだけで俺は満足なのだ。

俺は、こいつらに期待しているのかもしれない。ずっと欲しかった“本物”の関係というものを。ずっと上辺だけの関係に裏切られ続けていた俺にとって、この空間は今の俺にとっては大切な場所なのだ。

………柄にもなく、変に素直なことを考えると無意識に顔がにやけてしまった。

「………ヒツキー、キモイよ?」

「先輩、ちよつと顔ヤバいです……」

「その顔を見ると自然と携帯に手が伸びるわね……」

………まあ、こういうのも含めていいのかな………あれ、目から塩化ナトリウム水溶液が……

* * * * *

「じゃあ今日はこのあたりで終わりにしましょうか。」

部長様が部活終了の言葉を言い、皆部室に出た後、一色は生徒会に荷物を取りに行き雪ノ下はカギを返しに行った。

「んー！今日も終わったねー。」

背伸びをしながら、由比ヶ浜は独り言のように呟いた。

「まあ、明日も同じような感じなんじゃねえの?」

そうだ、明日も続く。日常とは続くから日常なのだ。

「うん……そうだね。そうなんだけど……」

……?急に由比ヶ浜は言葉の歯切れが悪くなった。

「……………ねえ、ヒツキー……………」

すると、何かを訴えかけるような目で俺を見つめてきた。

「ヒツキーは、何か一つ願いが叶うなら、どうする……?」

「えっ……?」

突然の問いに、答えが出なかった。何を言い出すんだこいつは。でもまあ、たまによくわからないことを聞いてくるからな……
……………こいつ?

いや待て、俺は何を考えてるんだ。

誰かに何か言われたっけ……?……誰に?

……………

まあいい。

そういや、一色は生徒会室に行ったんだっけか。

意外と一人で無理とかするからな、少し寄って見てみるか。

* * * * *

「あれ、先輩？どうしたんですか？」

「いや、手伝いを呼ばれる前に来ただけだ。別に他意はねえよ。」

「あ、ありがとうございます。でも今日は何もありませんよ。ポイント稼げなくて残念でしたねっ♪」

「どうやら無駄足だったようだ。初めのほうは素ぽったが、やはりあざといのなこいつ……」

「でも、ならなんでわざわざ生徒会室に来たんだ？」

「それはですね………というか先輩のほうこそ、結衣先輩置いてきたんですかあ？」

「………結衣先輩？こいつは一体誰のことを言ってるんだ……？」

「………そうですか、覚えてないってことは、もう少しですね……」

「はっ、いや、お前さつきから何言ってる……」

「そこまで言いかけると、一色は真面目な表情で……」

「先輩、早くしないと始まつちやいますよ……？」

「………は？」

返答したときには、すでに俺は一人だった。

* * * * *

「はあっ……はあっ……」

俺はとにかく走った。

さつきから何なんだこれは。自分の中から何かが消えていく感じ。

先ほどまで生徒会室で話していた、だが一体“誰”と話していたのか全く思い出せない。

というか、ホントに誰かと話していたのか？気を抜いてしまうとそう思ってしまうほど記憶が抜けている。

とりあえず、知っている人に今すぐ会いたい。誰でもいい。誰かいないのか……！

「あら、息を切らして何をしているのかしら喘息谷君？」

「はあっ……ゆ、雪ノ下……雪ノ下……だよな？」

今となつては自分の記憶すら信用できなくなつていた。こいつは雪ノ下雪乃ではないかもしれないが、雪ノ下雪乃という人物なら知っている。というか、学校内で知っている人はもう雪ノ下しか覚えていなかった。

「そう……もうそこまで来てるのね。なら多分、いずれ私のことも忘れるでしょう。」

「なっ!?……どういうことだ……? なんなんだ一体これは……!」

雪ノ下のことまで忘れる……? なら俺には何が残るんだ……!

「いい? これだけは意地でも覚えておきなさい。」

そういうと雪ノ下は俺に詰め寄つてきた。

「窮地になつたら、自分が欲するものを想像しなさい。なんでもいい、些細なものでも壮大なものでもいいの。その瞬間だけは理性より本能を優先しなさい。でなければあなたは——」

そこまで聞くと、また俺の中から何かが消えていった。

* * * * *

いつもの日常。

そう呼べるような俺の生活は相変わらず変わらない。

まず、朝は遅刻ギリギリで登校する。いつも通りだ。

休み時間、イヤホンをつけて寝たふりをする。いつも通りだ。

昼休み、テニスコート近くの昇降口で一人購買部で買ったパンを食べる。いつも通りだ。

数学の時間、内容が全く理解できない俺は熟睡する。いつも通りだ。

そして放課後、家に帰るためさっさと靴箱へと急ぎ足で行く。いつも通り。

.....ホントにいつも通りか？

何かあったはずだ。どこかに行かなければいけないはずだ。誰かと同じ空間にいたはずだ。

だがどこに？何を？誰と？まるで思い出せない。

思い出せないが、自然とある教室の前に立っていた。

ここに答えがあるのか？

わからない。

わからないが、俺は扉を開けずにはいられなかった。

入ってみると、そこは真つ暗な空間だった。何かないかと歩き回っていた。

ずいぶんと奥まで歩いた。こんなにこの教室広かったか？

それ以前にここに来たことがあるのかどうかすら覚えてない。

何もなかったので、引き返そうと振り返った。

その瞬間、

「~~~~っ!!!つぐあああああああああ!!!」

右手に激痛が走り、それと同時に扉が勢いよく勝手に閉まった。

痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い痛い。

訳が分からない痛みに悶え苦しむしかなかった。

———まだ候補者がいたのね。けど酷い有様、見るに堪えないわ。

俺が苦しみ叫ぶなか、鮮明に誰かの声が聞こえてきた。

———その様子だと、正規のマスターではないのですね。一体ここに何をしに来たの？

何を？そうだ、俺は何をしに来たんだ？

——まあいいわ。一応ここに来たのだから質問してあげる。ちゃんと聞いてなさい。

その声を聴いた時には、痛みが全身に走り、体が動かなかった。

——あなたは、何かに導かれてここに来ました。でも、ここから先は命の保証はありません。あなたが何も欲することなく、このまま帰るというのであれば、また“いつも通りの日常”が待っていることでしょう。さあ、選択しなさい。命を懸けて願いを叶えるか、安全な日常を過ごすか。

……酷い二択だな。こんなの、いつも通りの日常を選ぶに決まっているじゃないか。

けどまあ……

『ヒツキーは、何か一つ願いが叶うなら、どうする…？』

そうだな、どうしようか。実のところ、何かを欲することは最近まではなかったが、今は確かに俺は何かを欲している。

『先輩、早くしないと始まつちやいますよ…？』

わかってるよ。今言葉にしようとしてるところだ、もうちよい待ってくれ。

『なんでもいい、些細なものでも壮大なものでもいいの。その瞬間だけは理性より本能を優先しなさい。』

何でもいい、か。俺が心から欲しいもの、そーいやあつたな一つだけ。他人からすれば些細なことだが、俺にとっては壮大な願いが。

俺は……

「……俺は、命を懸けて願いを叶える……！」

痛みを耐えながら、俺はそう言い張った。

——はあ……念のために最後の確認しておきます。あなたの

願いは、命を代償にしてまでも、安全な日常を捨ててまでも価値のあるものなのですか？ ホントにあなたはそれでいいのですか？

なんだ、意外と優しいところがあるんだなこの人。

「ああ、確かに価値はないのかもな。好きなやつがいるわけでも親友がいるわけでもない。けど……」

形はない、もしかしたら俺が欲するものではない、そんな確証もないものだ。そんなものに命を懸ける俺は異常なのだろう。だが、

「あの空間の、あいつらとの関係がどうなるのか、俺はその先が知りた
いんだ……！」

一度彼女らの前で欲した本物が、もしかしたらそこにあるのかもしれない。その結末を知れるのなら、さっきまでの安全な“非日常”を捨てることさえいとわない。

……………フッフッフ、アハハハハハハ！！！！

酷く力ある笑い声が聞こえるとともに、さっきまでの痛みがなくなり、右手の甲に赤い紋章が

浮かび上がる。

すると、さっきまで真っ暗だった空間が強く光り始めた。

「そんな不確かなものに全てを投げ捨てるなんて、なんと愚かな人でしょう。」

そういいながら、俺の目の前に徐々に姿を現す。恐らくさっきまで声だけ聞こえていた人だろう。

「その上この私を引き当てるとは、何ということでしょうか。私の憎悪に導かれてここに来る物好きな人がいたとは。」

そして、完全に姿を現したとき、俺は硬直してしまった。

「はじめまして、くそったれさん。」

なぜなら、旗を掲げた黒い服を身にまとったこの女性に、

「サーヴァント、アヴェンジャー。召喚に応じ参上しました。さあ、私

と契約しましょうか。」
見とれてしまったからだ。

黒装束と白衣

「さあ、契約を。」

手を差し伸べてきた女性は、何というか、とにかく黒い。

衣装もそうなのだが、雰囲気というかオーラというか、そういうのも込みで身にまとっているものが全て黒い。だがそこから恐怖などは感じない。むしろ、少し寂しさも……………

その黒さとは真逆に、白く凜とした彼女の顔は、より一層美しく見える。

まあ、そんな彼女に、俺は言わなければならないことが一つある。

「いや、まあ、その前に今乗ってる机腐ってるからそのままだと……………」

「え？ってひゃあっ!!」

ガシャン!

腐ってた机が壊れ、黒い女性は盛大に転げ落ちた。なんというか…先ほどまでの雰囲気ぶち壊しですね……………あつ、ちよつと見えそう

……………

「いたたた……………もう、早く言いなさいよ!!」

なんか怒られたんですけど……………あれ、ちよつと顔が赤い?あー、これは恥ずかしさによる赤面ですねわかりますわかります。仕方ない、黒歴史において百戦錬磨の俺に……………ってなんだその悲しい経験則是……………。

まあともかく、俺の優しいお兄ちゃん属性を発動させてやるか。

「早く服装を正せ、下着見えてるぞ。」

「何が優しいお兄ちゃん属性よ!!?やるならちゃんとフォローしなさいよ腐れゾンビッ!!」

…やはりこれは妹にしか通じなかったらしい。ああ、小町どうして

んのかな……元気にしてたらいいんだが。

ん、待てよ……

「優しいお兄ちゃん属性って、俺口に出してたか？」

「はあ？私を召喚した時点で私とあなたの魔力のパスが繋がったんだから、テレパシーくらいできんでしょ。というか、変なことをテレパシーしてこないでくれる？」

やだもう、私と繋がってるだなんてなんだか卑猥だわお母さんそんなこと教えた覚えないわよ……いや、そんなこと考えてたらまた向こうに伝わってしまうのか。

……召喚した時点で繋がったって言ってたよな？

「え、待て待て。じゃああれか、俺がお前を初めて見たときに……あつ」

つとあぶねえあぶねえ……。これはあれだ、俺が余計なことを言ってもまた怒られるやつだな。うん、ハチマン学習したよ。

「初めて見たときに、なに？」

「いやその……そう、なんか契約とか言ってただろ。それは具体的に何すればいいんだよ？」

「あつ、そうそうそれよ！あんたが余計なことばっか言ってくるから忘れるところだったでしょ!？」

はい黙ってても怒られました。

もうわかった、最後まで付き合ってやろうじゃねえかこの理不尽に。伊達にいつも部室で氷の女王からの毒舌を（一方的に）喰らってる俺じゃないぜ。

「ゴホン！さて、契約の続きです。この聖杯戦争の間、私はあなたのサーヴァントとしてこの戦いに参戦します。まあ、私のことは武器とでも思ってくれればいいわ。そういうことで構いませんか？」

「俺のサーヴァント、ってことは、俺がマスター……ってことでいいのかわ？」

しかし戦争か、想像以上に規模がでかいな……。なるほど、命の保証はないってこういうことか。

「は？何を寝ぼけたことを言ってるの？」

「……ん？えっ？」

「え、何違うの？」

「あなたが私のマスター？はっ、笑わせないでくれる？なんであなたのことをマスターと思わなければならないのですか。あくまであなたは私の魔力供給源。いわゆるガソリンみたいなもんよ。とりあえず犬死しなければそれでいいわ。」

「ほほう、なるほど。そういや、初めに声が聞こえてきたとき正規のマスターではないとか言ってたな。つまり役立たずは黙って見とけてることか。オーケーよくわかった。」

「その前に、俺の右手の甲にあるこの痣みたいなのはなんだ？」

「…ホントに何も知らないのね。それは令呪、魔術師がサーヴァントと契約した証みたいなものよ。その上、サーヴァントに対しての絶対命令権でもあるわ。」

「…なるほど。」

そりゃ、召喚した側にそういうものがなかったら、召喚した時点でこいつにすぐ殺されてただろうしな。

「令呪を使用する条件は？呪文でも唱えるのか？」

「そんな大層なことになくても、令呪に命じれば発動するわよ。まあ、使う機会は早々ないでしょうけど。」

「ほほう、なるほどなるほど。」

絶対命令権って割に発動は簡単なんだな。契約の証でもあったか、つまり使う回数はなるべく少ないほうがいいな。戦いが始まる前に契約破棄とかなったら洒落にならないし。まあともかくだ、

「令呪をもって命ずる。」

「…はっ？」

「俺の質問に対して嘘をつくな、サーヴァントアヴェンジャー。」

ピカッ！と右手の甲が光り、それと同時に令呪が一つ消えた。どうやら正常に令呪が発動できたらしい。とりあえず一安心……ってわけにもいかねえよな……。ほらあ、目の前のサーヴァントがめちやくちや怒ってるよお……。

「……あなた、どういいうつもり？」

これにまでない緊張感、あの大魔王はるのんが可愛く思える。常に頭に銃口を突きつけられているような、死と隣り合わせの感覚。恐らく返答次第では殺される。こいつは本気で殺るつもりだ。

「私が、嘘をついてると？」

「それを今から確かめるんだろうが。だいたい、いきなり出てきたやつ of の言ってくることを全部信じろって？ 冗談きついで。」

……正直やってしまったと思った。が、むしろさっきの威圧感がマシになっているようだ。だが、まだ油断できない。

「先に言っておくが、俺はお前を武器として扱う気もないしそう思ってもない。それにお前のガソリンになる気もないからな。確かに魔術云々の知識は皆無だが、見た感じお前あんまり頭使えないだろ。だから、俺がお前の頭脳になってやる。」

うん、ダメだな。これはもう死んだんじゃねえの俺。面と向かって頭使えないから俺が代わりになるとか言われたら流石にやばいだろ……。まあでも代わりに目になるよりマシだろ。ほら、この腐った目よりも……俺泣いていいよね？

「だから、提供する情報に嘘をつくな。わかったなサーヴァント？」

「……………っ!!」

これを守られなければ、どの道死ぬ。だから、強制的に嘘をつけないようにした。これで、俺の満足のいく条件はクリアされたな。

「さて、質問の続きだが、もう一つ。アヴェンジャーって本名じゃないだろ？ お前の本当の名前はなんだ？」

「……………わ、わた…し、は……………つつ!!」

なるほど。確かに嘘はつくな、とは言ったが質問に答える、とは言ってなかったな。そういう命令の回避はできるのか。

しかし、何故名前を知られたくないんだ？知られることで何かデメリットが……………？

こうなると仕方ない、少しもつたないが、二つ目の令呪を――

「おや、これは驚いた。魔力を感じたからまさかとは思ったが、もう一人参加者がいたのだな。」

聞き覚えのある声。

振り返るとそこには、白衣をまとった俺の恩師が、

「少し特殊なマスターのようだが、歓迎しよう。ようこそ129人目のマスター、比企谷八幡。」

平塚先生が立っていた。

* * * * *

「さて、ここなら誰にも見られないし聞かれないから安心したまえ。」

サーヴァントを召喚した部屋から出て、俺は先生に連れられて生徒指導室に入った。しかしその際、サーヴァントはこの部屋に入れないらしく、霊体化して外で待っているとのことだ。ていうか霊体化とかできんのかよ。リアルステルスヒッキーができるじゃねえか。

そんなことを考えていると、先生が口を開いた。

「一応確認したいのだが、君は比企谷八幡で間違いないね？」

……………どういうことだ？俺が偽物だと疑っているのか？

「む……………？ああ、なるほど。君が元居た世界では、私のこの姿の人は

君の知り合いなのかな？ だったらこんな質問をされると戸惑うのも無理はない。先に私について説明するとだね、私はこの戦いにおけるいわゆる案内人だ。姿はランダムで作られるのだが、今回たまたま君の知り合いになっただけで、中身はただのプログラムだよ。」

そういうと、先生は自分で用意したコーヒーカーップに口をつける。そのしぐさも、声も表情も、見れば見るほど俺が知っている平塚静とは別人というのが信じられなかった。いや、プログラムだから別物というべきか。

「信じられないようだな。まあ、それならそれでも構わないさ。重要なのは私ではない。今の君の現状だ。」

急に空気がシンとなった。どうやら相当やばい状況らしい。

「どんなに危機的な状況でも、？ 偽りなく話してください。今の俺には、情報を集めることしかできないようなので。」

「そうか、初めからそのつもりだったが、改めて言われるとこちらも気兼ねなく話せるよ。それに、君はこの聖杯戦争のことをあまりわかってない状態ですでに、情報の重要性を理解しているようだ。」

では順に説明しよう、と言いながら先生は立ち上がり、ホワイトボードを使いながら語り始めた。

「君が参加したのは聖杯戦争というサーヴァントを使ったデスゲームだ。しかし、通常の聖杯戦争と違って今回は、人数の多さと参加者の平均年齢を考慮してトーナメント方式の戦いとなる。対戦相手はランダムで決まり、掲示板に掲載される。そして、決戦までには一週間間の猶予があり、その間に別エリアに行き、カギを二つ獲得すれば一週間後の決戦への参加が認められる。まあその辺のことは後で資料を渡そう。総勢128人による全七回戦の戦いだ。本来ならな。」

「待ってください、総勢128人って、確か俺は129人目のマスターなんですよね？」

「だから言っただろ、本来なら、と。今回の聖杯戦争に君は参加できなかったはずだったんだよ。」

「……どういうことですか？ 貴女がプログラムなら、このゲームもプログラムによって制御されてるんですよね？ 何かの拍子にバグでも

起こったんですか?」

そう質問すると、平塚先生は少しニヤリとして説明を続けた。

「部室で君を見つけたとき、初めに言った私のセリフを覚えているか?」

…初めのセリフ??

「……………魔力を感じたからってやつですか?」

「その通り、魔力を感じたんだ。恐らくそれが答えだろう。」

んん? 話が見えてこない…

「わからないか? さつき説明した通り、今回の聖杯戦争はトーナメント方式だ。」

「それはちゃんとわかってますよ。通常がどんなものか知りませんが、人数の多さと参加者の平均年齢でその方式になったんですよ?」

「そうだ。では、その平均年齢はどのくらいだと思う??」

「……………なるほど、会場が学校なものと、案内人が先生の姿というところから察するに、平均年齢が低い、つまりほとんどが子供のことですね。」

これで戦争なんて大層なものが、学校内で行われる理由がよくわかった。

「ああ。言い方を変えると、まともな魔術師がほとんどいない。魔術の知識はあっても、魔力量が全体的に少ないんだよ。プログラムの私たちでさえ、感知するのが難しいレベルさ。」

「それはおかしくありませんか? 先生が俺を見つけたのって、魔力を感じたからなんですよね?」

「全く、自分のことだと察しが悪くなるようだな…。君は確かに魔術の心得はないが、通常の魔術師と同等以上の魔力量がある。だから、こんなイレギュラーな形になっても参加できたんだろう。」

…つまり、素質だけを見ると俺は魔術師と同格ってことなのか……。そんな片鱗は見たことないが、事実俺が参加できてることを考えるとそうなのだろう。

「さて、君が参加できた理由はこんな感じだ。続けて本題の、君の現状

だ。」

「やつと本題だ。いくら子供がほとんどとはいえ、これは戦争。自身の状況がどんなものか、最悪を連想してしまい、おもわず息をのんだ。「まずは悪い知らせだ、今すでに一回戦が始まっている。」

「っ!？」

それは不味い…あと何日残っているか知らないが、この時点で相手にアドバンテージがあるってことじゃないか!

「まあそう焦るな。君は一回戦目を免状、つまりシードという扱いになっっている。」

「あつ、そっそうなんすか……。」

それを先に言えよ……こっちは命かかってんだぞ…

しかし、ホツとしてもいられないな。

つまり俺は、ほかの人よりも実戦経験が少ない状態で二回戦を迎えることになる。ただでさえ魔術師としての知識がないのに実戦経験も少ないとなると、かなり厳しくなりそうだ…

「シードということ以外のもう一つ良い知らせだ。君には特別ギフトが贈られることになっている。さっきも言ったが、聖杯戦争のことやサーヴァント、魔術師などのことを記した資料だ。情報戦を重視している君にとってはこれ以上ないアイテムなのではないか?」

「それは……確かに助かりますが……」

いくら何でも待遇が良すぎる。何か裏があるんじゃないや……

「言っておくが、君を特別扱いしてるわけでも裏があるわけでもない。実戦ができないを言うデメリットがそれだけ大きいということだ。二回戦目は、覚悟しておくんだな。」

……頭ではわかっていたが、改めて言われると事の重大さがよくわかる。

「さて、説明は以上だ。ああそうそう、君の部屋は二年F組の教室だ。マイルーム出はこの部屋同様、他のマスターからの干渉は受けない。サーヴァントと密談や作戦会議などするときには利用するといい。もちろん、聖杯戦争中の寝床もその部屋だぞ。」

とりあえず二回戦までどうするか、あの黒いサーヴァントと話し合

うため、資料をもらい、生徒指導室を後にした。

* * * * *

「……………」

平塚先生に言われた通り、二年F組に入って貰った資料を読んでいた。最初は机が並んでるだけの普通の教室と思っていたのだが、中はなんと俺の部屋と同じだった。もちろん俺の部屋は教室よりも小さい扉は一つしかないのだが、教室の前後ろ両方の扉から入っても俺の部屋に繋がっていた。何でもありだな魔術。

さて、沈黙しているのは俺ではない。現在俺はもらった資料を見ながら頭に叩き込むためにぶつぶつと言っている。ほら、英語とかもそうやって覚えるだろ？だから気持ち悪いとか思わないでね？

そう、沈黙してこちらを睨んでいるのは俺のサーヴァントだ。ていうかそこ俺のベッドなんですけど。枕を抱きしめてながら睨まないで？その枕俺使えなくなるでしょ？

まあ怒っているのも仕方がない。召喚した直後に令呪を使い、嘘をつけないようにしたのだ。信頼関係などまっぴらごめん、と普段の俺なら言うところなのだが、資料を読む限りそうも言ってもらえないらしい。

「…あくその、なんだ…」

自分から話しかけるということをしてこなかったつけか、言葉が出てこない。うん、八幡頑張ってるからそんな睨まないで？

「あの時は、その、ありがとな…」

「……………何のことですか？」

謝罪ではなくお礼。

俺は令呪を使ったことに関しては罪悪感はない。むしろ必要な措

置だと思っっているまでだ。

「あの時、お前本名……いや真名って言ったほうがいいか。あの場で真名暴露してたら誰かに聞かれる可能性があった。あれは俺が軽率だったけど、お前のおかげでそうならずに済んだ。だから、ありがとう。」

サーヴァントとは、人類史に名を遺した英霊であり、聖杯戦争において相手のサーヴァントの真名を暴くことこそ勝利への道となる。逆を言えば、バレてしまうと過去の伝記から弱点などが知られてしまうかもしれない。

「……………別に、そういうつもりで言わなかったわけじゃ…」

え、違うの？ じゃあなぜなのか、そう問う前にサーヴァントは答えた。

「この姿で私の真名を知ると、あなたはきつと失望する……」

これは本音かわからない。なぜなら嘘をつけないのは俺の質問に對してだけだから。だが、その言葉には嘘が感じられなかった。

「まあ、別に今すぐ言わなくても「言うわ。」…え？」

「だから、真名を教えるって言うてるのよ。それを聞いて失望するといいわ!!」

そういつて高らかに笑う。枕を抱きしめている腕が震えていたのは笑っていたからなのか、それとも…

「んじや、教えてくれよ。ああ、俺は比企谷八幡だ。俺のことをマスターとして見たくないらしいからな、呼ぶときは名前で呼んでくれ。」
「あつそ、八幡ね。まあどうでもいいけど。」

どうでもいって言うてる割に早速名前前で呼んでくれるんですね。ちよつと嬉しく思ってる自分がいる。

「では今度は私ね。私は——」

…実は、サーヴァントが名の知れた英霊ということを知ってから大体の予想はついていた。確かに伝記からのイメージとは違う。だが、

大きな旗に綺麗な女性。さらに憎しみや憎悪を感じさせる黒装束。何より俺が想像していた通りの姿。彼女は――

「私は竜の魔女、ジャンヌダルク。この世全てに憎悪し、この度はアヴェンジャーのクラスで召喚されました。あの時の契約がまだだったわね。私とともに勝ち抜きなさい八幡。」

そういうとジャンヌは手を差し伸べてきた。俺は迷いなくその手を取る。

確かに俺は俺の願いのために戦う。それは彼女も同じだろう。

しかし、少なくとも俺は、この戦いの間だけは、この見惚れた彼女の綺麗な顔を、出来る限り守っていこうと誓った。

「だっ、だから………変なことを考えるなって言ってるでしょ!? バカ！アホ！ハチマン!!」

……その前に、このテレパシーをどうにかしようと思っただ。

聖杯戦争開始前 他のマスターたちは……

総武高校。

私たちが通っている学校であり、県内有数の進学校である。

しかし、現在はもうただの学校ではない。ここはもうすぐ戦場となるのだ。

ある日、実家に帰った時、書物を整理しているとある一冊の古びた本を見つけた。

「……何かしら、これ……」

たいした興味もなく、ただどんなものなのか、という小さな疑問からその本を開いてしまった。

そのせいで、この戦争のことを知ってしまったのだ。

「……願いを叶えるために、殺しあう……ですって？」

初めは馬鹿馬鹿しいと信じていなかったが、ネットやほかの文献で調べていくと、どうやら本当に願いを叶えるものらしい。

聖杯、というものは。

そして、次に行われる場所が何の偶然か、自分が通っている学校であった。更に、通常とは違うトーナメント方式で行われるそうだ。

人を殺してまで叶えたい願いなど、自分にはないと思っていた。しかし、実際本当に叶える願望器の存在を知ってしまった。

私ではもう叶えることができないと思っていた。

でも、それが叶えられるなら――

「私は……この戦争に参加する……!」

そう決心した私は、学校内唯一の友人にも、聖杯戦争の存在を教えることにした

* * * * *

珍しくゆきのんからメールが来たかと思ったら、何やら物騒な内容だった。

戦争で勝ち抜けば願いが叶う？みたいな、そんな感じ。

「どうしちゃったんだろ、ゆきのん…」

他の子からのメールなら、多分軽く流してた。

でも、私が最も信頼する友達から珍しく来たメールだ。そんなことは出来ないよね。

どんな願いでも叶える、かあ…。

もしホントなら、私は何を願うんだろう。

お金？

能力？

世界征服？

ううん、どれも違う。

そもそも私は、今に満足してるもん。

…あつ、そっか。あつた、私の願い。

自覚した途端、どんどん叶えたい欲が膨れ上がってくる。

この願いを叶えるためなら私は、

命だって懸けれるよ——

* * * * *

「はあ、めんどくさいなあ…。早く部室に行きたい…。」

全く、いくら生徒会長だからって一年生に仕事与えすぎじゃないですかね！

まあ、私の仕事量は他のみなさんの半分くらいなんですけどつ。

それもこれも全部あの先輩のせいだ。まあ、あの先輩って言っても私が先輩と呼ぶ人は一人しかいない。

この仕事が片付いたら、今日もまた遊びに行こう。ふっふっふ、覚

悟してくださいね先輩っ！

ーピロンツ

不意に聞き慣れたメロディーが流れる。どうやら私の携帯が鳴ったみたいだ。

「んー？……なにこれ…？」

来たメールを確認すると、なんだかよくわからない内容だった。

そういえば以前、奉仕部でチェーンメールの相談があったという話を聞いたことを思い出した。今回もきつとそういう類のものだろう。

しかし、送信者のメアドが見たことないものだった。

なんだ、ただのいたずらメールのようだ。

「こういうのって、検索したら一発で…！」

私は自分（が使ってる学校）のパソコンで、メアドをググってみた。身に覚えのない電話やメールなどは他の人にも来とることが多く、検索すると大概迷惑メールや迷惑電話のリストに載っている。それを確認すれば心置きなく着信拒否できるって感じ。

「どれどれ……え、参加資格？なんなのこれ…！」

検索すると、聖杯戦争？とかいう参加資格を持つものに送られるメールだ、という情報が載っているページを見つけた。

どうやら、今度の聖杯戦争というものはこの総武高校で行われるらしく、生徒会長は無条件で参加を認められているそうだ。学校で行われることなどホントに極稀のようで、過去の総武校生徒会長が参加したという記録は残っていない。

……私が初めて？

謎の優越感が生まれる。これっぽっちも信じていなかったこの話について、私は真剣に考えいた。

もし、何でも叶うなら、

どうしようもない、私のこの願いがホントに叶うなら、

「…覚悟してくださいね、先輩方。」

*** **

この戦争に参加するにはいくつか条件がある。

- ・ 聖杯戦争の存在を知っていること。
- ・ 例え魔力がなくても、魔術の心得があること。
- ・ 命を懸けてでも叶えたい願いがあること。

以上の三つを満たせば、誰だって参加できてしまう。

そしてそのせいで、参加者が過去最多級の人数になってしまったのだ。

聖杯戦争とは、古来より数少ない魔術師から更に厳選された魔術師全七名による戦いだっただ。

そのため、いくら殺し合っても世間にさほど影響はなく、だからこそ、この戦争の存在は表に出ることはなかった。

しかし今回、1000人を超える参加者となってしまった。

そこで、聖杯戦争の管理プログラムは対策を検討した。何か別の方法ははないか、と。

すると、参加者全員の共通点を見つけた。

皆、ある高校の生徒、または関係者であることがわかったのだ。

そこから管理プログラムは、過去に月面で学校を舞台とした聖杯戦争をベースとしたものに、今回することを考えた。

・ 戦いは指定された決戦場、もしくはカギ探索を行う別エリアだけで行うこと。ただし別エリアで行う場合、制限時間付きである。

・ 校内の時間を進む早さは世界とは隔離され、今回の聖杯戦争は、一般時間では一日間となる。

以上二つのルールは、参加者皆知っているルールである。

だが、三つ目のルールは誰も知らない。

これは管理プログラムだけが知ることであり、聖杯戦争の案内NPCでさえ知らない情報なのだ。

誰も知る由もない。

知らないからこそ、1000人を超えるマスターたちは決死の覚悟で戦いに挑む――

『さて、聞こえるかな？128人のマスター諸君。』

聖杯戦争に参加することを決心した私、雪ノ下雪乃は案内NPCに連れられて指定された部屋に案内された。

しかし、まさか平塚先生の姿とは驚きを隠せなかったわ……。他のみんなもそうであつたもの。

驚いたことといえば、他の参加者がほとんど総武高校の生徒であつたこと。

顔見知りと殺し合うなんて少し辛いけど、もうそんなことは言つてられない。みんな殺しに来る。願いを叶えるために。

ここに来たからには、優しさはもう捨てなくては……

そんなことを思っていると、再び平塚先生……のNPCの声が聞こえてきた。

『戦いの前に、皆には自身の使い魔である、サーヴァントを召喚してもらう。通常、召喚において使われる触媒によって召喚される英霊が決定するのだが、今回は参加者の人数が多く、召喚されるサーヴァントが重なる可能性がある。英霊によっては複数クラスを持たないものもいるため、クラスは基本七騎士からの完全ランダムということになる。必要なのは呪文だけだ。より強いサーヴァントを引き当てるところを祈っているぞ。』

そこでアナウンスが終わる。とうとう来てしまった。

この召喚は自分の生死に関わるといつても過言ではない。

触媒がいらぬことは事前に知っていたが、上位サーヴァントを引き当てる方法は最後までわからなかった。

だから、悪あがきのようにひたすら魔力上限を上げていた。魔力値の高さとサーヴァントの強さが比例するのではと考えたからだ。

「もう、腹を括るしかないわね……」

はあ、と一つ深呼吸とし、右手を伸ばし、呪文を唱える準備をした。

「―――告げる」

* * * * *

―数分前

アナウンスが終わった後、皆が部屋で呪文を詠唱し始めた。

別ルームでは、金髪的美形青年が、

「素に銀と鉄。礎に石と契約の大公。」

また別ルームでは、眼鏡をかけた清楚系腐女子が

「降り立つ風には壁を。四方の門は閉じ、」

目つきの鋭い長髪の長身ポニーテール女子が、

「王冠より出で、王国に至る三叉路は循環せよ。」

髪が少し赤い短髪女子が、

「閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。閉じよ。」

髪が亜麻色セミロングの生徒会長が、

「繰り返すつどに五度。」

ウエーブのかかった茶髪のスタイルのいい童顔女子が、

「えつと…あつ。ただ、満たされる刻を破却する」

そして、綺麗な黒髪ロング女子が、

「―――告げる」

各々自分の部屋で呪文をここまで唱えていると、目の前に描かれた魔法陣が赤く光り始めた。

おっとりした雰囲気のある三年女子が、

「汝の身は我が下に、我が命運は汝の剣に。」

黒髪セミロングの女子大生が、

「聖杯の寄るべに従い、この意、この理に従うならば応えよ」

体格が太めの眼鏡をかけたロングコートの男子が、

「誓いを此処に。我は常世総ての善と成る者、我は常世総ての悪を敷く者。」

参加者の中で最少年の女子小学生を含む数人は、他の人よりも呪文が数節多く、

「されど汝はその眼を混沌に曇らせ侍るべし。汝、狂乱の檻に囚われし者。我はその鎖を手繰る者——。」

そして…

「汝三大の言霊を纏う七天、」

魔法陣の光が強くなり、そこから風が発生している。部屋の中はめちゃくちゃになり、気を抜けば自分まで飛ばされそうになる。

皆、呪文が残り一節を残す。

参加者は、最後の1節に全ての力を込めて……………

「二」抑止の輪より来たれ、天秤の守り手よ——！」「三」

ピカツツツ！！！！

目の前が真っ白になるほど魔法陣が光り、強い衝撃を感じた。

だんだんと光が弱まり、皆自分のサーヴァントを確認する。

「……………勝った。この勝負、僕の勝ちだ……！」

「うーん、出来れば男の娘が良かったんだけどな、ぐ腐腐」

「……………これは……………猫耳？」

「これであいつを……………覚悟しな…ヒキタニ……！」

「んー、この人は当たりなんですかねえ。」

「おー、なんかカッコいいね！」

「……………よりもよって、このサーヴァントだなんて……」

「一緒に頑張ろうね〜！おー!!」

「…やっぱり、予想通りだ♪」

「フハハハ！サーヴァントよ、我に従え！…あ、すいません冗談です」

「……………まずは制御しなきゃ……………、それができれば…」

128人のマスター達が英霊の召喚に成功し、早速一回戦が始まった。

その時、誰も考えもしなかった。

この後、129人目のマスターが参戦することを。

そして、そのマスターのサーヴァントが特殊クラスであることを

……

1回戦

6日目

聖杯戦争。

今は1回戦目の6日目。決戦前日ということになる。

普通の参加者ならば、もうすでに戦う準備をし終えて夜も眠れないほど緊張していることだろう。

「ちよつと、八幡。」

だが俺は違う。

特別枠の俺は、1回戦免除。シールド扱いとなっている。

どうやら俺には一般魔術師並みの魔力があるようだ。今回この戦争に参加できたのもそのおかげらしい。

「八幡？ねえ八幡？」

だから俺には、他の人と違って幾分余裕がある。

ならば何をすべきか？2日目に向けての準備、つまり、英気を養うことだ。戦いといえば勝負ごとにおいてよく、腹が減っては戦は出来ぬ、というが、普通に考えてそれより心配することは、ちゃんと眠れているかどうかだ。ストレスで暴食になってしまうことはよく聞く話だが、ストレスや心配事を抱えた状態で熟睡することは中々難しい。2回戦からは俺も戦うわけだから、よく眠れる日は早々に来ることはないだろう。だから俺は次の戦いに備えて再び布団に身を預け

「いい加減にしなさいよこのニート!!昨日からずっと部屋にこもりっぱなしじゃないの!!」

「ちよつとおまつ！布団をはがすなよ寒いだろ…!」

「うるさいわよ！私ここにきてから何もしてないじゃない?!いい加減暇なのよ!」

朝からうるさいのは俺のサーヴァントであるジャンヌダルク。

教科書やそれについての書籍では聖女なんて書かれているが、ふた

を開けてみれば存外普通の元気な女性だった。

少し蛇足をつけさせてもらうと、先ほど布団に身を預け、といったが、俺は普段ベッドで寝ている。しかし昨日と今日は敷布団で寝ているのだ。

理由は簡単、この黒女にベッドを独占されているからだ。霊体化しておかないのかと聞いてみたが、普通の状態にいるほうが何かと都合がいいらしい。とりあえず俺はもうベッドでは寝れないようだ。いやほら、なんかあいつ妙に気に入ってるみたいだし、あと匂いとか……つて危ない危ない。またテレパシーが発動するところだったぜ。

話を戻して現在、シードの参加者が俺であることを気づかれないように2回戦が始まるまで部屋にこもっていようと思っていたのだが、どうやら我慢の限界らしい。

「つってもなあ、俺らの存在はあんまり知られたくないし、出来れば外に出たくないんだが……」

「でも暇なのよ！別に、私さえ霊体化してればあなただけ姿を見られてもいいんじゃないの？」

んー、それもそうかもしれないが、まあ、決戦2日前に俺のことを気にする奴は早々いないか……こうなれば腹をくくるしかない。

「……………行くか？」

「あら、物分かりのいいマス…八幡じゃない。」

「いや、物分かりのいい八幡ってなんだよ……………」

俺は年下の女の子に弱いのかと思っていたが、どうやら駄々をこねた女に弱いらしい。

ここ一番に嬉しそうな顔をしたサーヴァントを連れて、俺は渋々扉を開けた。

* * * * *

「別エリアに行きたい？」

俺はなるべく人目につかないように移動し、平塚先生の姿をしたNPCのもとへ行った。

出る前にいろいろ考えていた。会場の視察をしようと思ったが、資料によれば総武高校と瓜二つの構造をしているらしい。流石に通っている学校のことを今更見て回ろうとは思わない。

次に、顔見知りにお会いしようと思っただが、変に関われば今後に影響が出るかもしれないのでやめておいた。

散々悩んだ末に、まだ見ていない別エリアを確認しておこうと思った。2回戦以降もそこに行かなければならないのだ。見ていて損はないだろう。

何より、俺のサーヴァントはそろそろガス抜きをしないと部屋の中で暴れそうだし……

「1回戦は免除されて、マスター同士の実戦はなくなりましたが、別エリアに行く分には構いませんよね？」

だが、問題なのは実戦というのが別エリアに行くことも含まれていないかもしれないことだ。

俺は1回戦免除で実戦をしない代わりに資料を受け取った時点で取引は成立している。だから、ここで向こうにダメだ、と言われるとどうしようもできない。

と、思っていたのだが、

「そういうことなら構わないさ。丁度、空いたエリアがあつてな、扱いに困っていたところだ。確かに実戦は見送るように言ったが、エリアに行つてエネミーと戦うのは皆1回戦前にしたことだ。むしろ、君もしておかなければな。」

……空いたエリア……か。

つまりそれは、すでに脱落者がいるということ。

つまりそれは、すでに誰か死んだということだ。

もしかして、あいつらの誰かが………

ダメだダメだ。そんなことを気にしていたらこの先に進めない。

今は気にせず、こちらの要件を進めなくては

「一つ注意しておこう。例え別エリアの滞在時間が一分であっても、こちらに戻ってくると夜になる。知つての通り、聖杯戦争中は夜に外での活動は禁止してる。別エリアに行く前は、用事を済ませておくことだ。」

「そういやそんなことも資料に書いてありましたね。わかりました、ありがとうございます。」

「では、別エリアへの扉は、君が英霊を召喚した場所だ。言わなくともわかるな?」

そう言うと、NPCは微笑み立ち去った。

全く、ホントに先生に似てるなあ…。NPCでも男前じゃねえか…。たいした用事もなかった俺は、あの部屋に直行した。

「あつ、そういうえば、現在の別エリアは第二暗唱鍵取得のための第二層で、エネミーのレベルが通常より高いんだつたな。……まあ、あの二人なら大丈夫か。」

* * * * *

懐かしい

いや、あの時から全然時間はたっていないのはわかっている

だが、この教室の前に立つと、あの三人が楽し気に談話してる風景が思い上がってくる。

この戦いに勝てば、また見れるだろうか。

そうだ、勝たなくては

そのためにもやはり部屋に戻って英気をやしな痛い痛い痛い!!!

「何戻ろうとしてんのよ!!早く入りなさいよ!」

「わかった、わかったから横腹をつねるのはやめろやめてください。」
こいつ本気でつねりやがったな。自分が英霊つてことわかってんのか……?

…
というか、いつになったらこのテレパシーを制御できるのだろうか

まあ、冗談はこの辺までにして、

「…行くぞ、アヴェンジャー。」

「ええ、行きましようか八幡。」

気持ちを切り替え、戦いの場に繋がる扉に手を伸ば痛い痛い痛い!!
「今度はなんなんだよ…!?あとピンポイントで同じところをつねるのやめてくれる?マジで痛いんですけど。」

「あーごめん。ちよつと気になって…」

「気になる?何が?」

「あれ、あそこの扉。」

「はあ、扉?」

あれだけ行きたがってたジャンヌが足を止めて何を言うのかと思えば、気になる扉?

ジャンヌは奉仕部の部室の横にある、廊下の正面にある扉を指さした。

……あんなところに扉とかあったか…?

「それで、あそこがどうしたんだ?」

「え?ああ、いや…なんか気になって……。あそこは誰かの部屋なの?」

「いや、この階には個人ルームはないって聞いたぞ。物置部屋じゃないのか?」

「…そう。まあいいわ、さて行きましようか。…ほら、早くしなさい!」

「止めたのお前だよな?俺無駄に横腹つねられたよね?」

仕切り直し、俺は別エリアへ向かったのだった。

* * * * *

「やっと戦闘ね。さあ、どんどん燃やすわよ！」

入って一言目から物騒なことを言ってるなあ…

しかし、思ったよりシンプルな構造になってるようだ。簡単に言うと、簡単な迷路のようになっている。

資料によれば、一度通った道は端末に記録されるらしい。例え行き止まりと分かっているとしても、念のため全部の道を通ったほうがよさそうだな。

「よし、片っ端から歩いていくぞ。とりあえずその分かれ道を右だ。」

「仕方ないから、ナビは貴方に任せるわ。」

今回の目標は、礼装を入手することだ。礼装とはマスターの装備品であり、アイテムの他に戦いに加入できる唯一の方法である。回復はアイテムでできるから、支援効果のある礼装を見つけられるといいのだが…

「八幡、来たわよ。」

「え、もう?」

はあ…できれば会いたくなかったのだが、早速エネミーと出会ってしまった。

まあ平塚NPCによれば初戦はチュートリアルみたいな感じらしいし、絶対勝てるようになってるじゃあ…

……って、あれ?

「…レベル…7? 待て待て、第一層の別エリアはエネミー最大でもレベル3までって聞いてたんだが…」

先に説明しておくが、全マスターは、エネミー・敵サーヴァントを認識し、見ただけでレベルがわかるようになってる。

まあ、わかりやすい話スカウターみたいな感じだ。今では戦闘力5か…ゴミめ、とも言ってられない。レベル5は現時点ではそこそ高いほうになる。

それくらいのはずなのに、レベル7?

「ホントにここ第一層なのか？……っっておいおい、ここ第二層じゃねえか……！」

「なに？まずいの？」

「まずいっってお前……倒せるのか？」

ポケ○ンならタイプ弱点の技出してたらレベル高くても倒せるが、エネミーにはクラスがない。弱点がつけられない分、単純な力量差が勝敗を決める。

「まあ、ものは試しよ。とりあえず私に指示しなさい八幡。あなた、私の頭脳になつてくれるんでしょ？」

ジャンヌは微笑みかけた。

参ったな………そんな顔されたらもう断れねえよ。

「…よし、初めは遠距離から様子見だ。」

「了解よ。見てなさい八幡、あなたのサーヴァントがいかに優秀かってことをね！」

早速ジャンヌはノリノリのようだ。

さて、遠距離攻撃を指示した理由は二つある。

まず一つは、言った通り様子見。

戦いに慣れてない俺にとって、いきなり接近戦の指示は難しい。ジャンヌの戦い方や能力を直で見るとしても、まずは遠くから攻撃をさせることに越したことはないだろう。

二つ目は、ジャンヌの保治スキル。

こいつには自己回復(魔力)(A+)というスキルがある。なんでも、魔力を微量ながら毎分回復していくらしい。中でもこいつのクラス、アヴェンジャーは特級の回復量なのだ。

それならば、魔力を消費する遠距離攻撃をしてもあまり支障はないはずだ。

ジャンヌは右手をエネミーに対してかざし、魔力を込める。さあ、こいつはどんな技を使うのか、少し楽しみだ。

「初撃から飛ばしていくわよ。燃えろ!!」

バァー————ン
!!!!!!

……………ん？

……………え、待つて？

こいつさつき燃えろつて言わなかったか？
敵を炎上させる技だったんじゃないの？

「……………」

「……………」

そばで見ていた俺だけでなく、当人であるジャンヌでさえ呆然としている。

いやいや、これやったのお前だからね？

ていうかこれどうすんのマジで…

「……………えつとな…」

「なっ何よ!? 敵は倒せたんだからいいでしょ!？」

「いやまあ……………うん。倒したね、完膚なきまでに圧勝だよ。けどどな……………」

「あー聞えない! 私は何んにも聞こえないからー!!」
確かに勝った。それはいい。いいんだが…

早い話、エリアが全壊していた。

* * * * *

「いやあ、見通しがいいなー。見ろよ、最深部まで見えるぜ。」

「あー! もううるさい!! 仕方ないでしょ初戦だったんだから! 加減が分からなかったのよ!」

まあ、ある意味当たりだったな…。

だってほら、魔力はほぼ無限に生成される最大火力のアタッカーだぞ。

しかも、俺自身の魔力値は一般魔術師と変わらない。うまく組み合わされば、さつき以上の火力が出ることだろう。…………それは大丈夫なのだろうか…

「おつ。ジャンヌ、これ見ろよ。」

「んー？あー、早速見つけたのね、礼装」

今回の目的だった礼装を見つけたことができた。…まあ、こいつがエリアを全壊してくれたおかげで探しやすくなったというのものもあるが、これ以上いじるのはやめておいてやろう。

「これを装備すれば、俺も魔術使えるようになるんだよな？」

「まあ、よっぽどのものでない限り使えるわよ。それで、能力は？」

「えつとな、低確率で敵をスタンする”っていう能力だ。…使えるか？」

「スタンできれば相手の動きを止めれるから使えるけど、低確率ってというのが微妙ね。初めのものにしてはまだマシじゃない？」

「そうか…………。とりあえず、帰るか。戦闘経験を積もうにも、敵いないし。」

「うっ…………。そ、そうね。今回はこの辺で満足しておいてあげる。」

おっと、また元気をなくしてしまったな。仕方ない、部屋に戻ったらとっておきのデザートを分けてやろう。

* * * * *

入る前の緊張はどこへ行ったのやら、俺は家に帰るときくらいリラックスした状態で戻ってきた。

一番の要因はやはり俺のサーヴァントの能力を見たからだろう。

油断は少しもできない、そんなことはわかっている。

しかし、ハッキリ言っただけ負ける気がしなかった。それくらいジャンヌは強い。

「さて、戻るぞ。帰ったら念のため休んどけってうわっ、マジで夜だな…時間感覚狂いそうだな。」

「……………待って八幡。」

振り返ると、今日一番に真剣な顔をしているジャンヌ。

「ここに入る前に、私が言っていたこと覚えていますか？」

「あつああ、その物置部屋の話だろ。それがどうかしたか？」

「そういえば、うやむやに話が終わってたな。この部屋がどうかしたのだろうか…」

「間違いありません、ここに敵マスターがいます。」

「!?」

「そんな…!この階にマスターの部屋はないはず。」

「しかし、嚴重な結界が施されているようね。確認しようにも、入室は困難かと。どうする?」

「どうするって言われても、ここでの戦闘は禁止なんじゃ…」

「そういいながら、物置部屋にもたれかかる。」

すると、ガチャ、と音が鳴った。

…あれ?」

「これもしかして、開いた?」

「そのようね…。これはもう、確認しろって言ってるようなものでしょー!」

全く、なんでこんなイレギュラーなことばかり起こるんだ……………」

しかし、開けたからには中を確認しなくては。

心でそう言い訳しながら、ゆっくりと扉を開けると、

「ひっ…!?こっ来ないで!!!……………って、あれ…?」

「おっお前……………!!」

そこには、俺のよく知る人がいた。

人というより、天使かな。しかし、今は怯え切った表情で体を震わせている。

「……………お、お兄ちゃん?!」

7日目 決戦日

一回戦七日目。

今日まだマイルームにいるのは恐らく俺だけだろう。

何しろ、七日目は決戦日。今頃他のマスターたちは二回戦へ勝ち進むために戦っているころだ。

いや、もうはつきり殺し合っていると聞いたほうがいいのか。

「まっずー！なにこのパン、人に食べさせる気あるの!？」

この戦いで100人以上だった参加者が一気に60人程度になる。

恐らく大半の奴は、負ければ本当に死ぬなんて考えてないだろう。

だからこそ、二回戦からの相手は誰であろうと油断できない。

何故なら、生き残った人たちは皆人殺しだからだ。

「ふくん、まあまあだったわねこの本。…ねえ、これ続かないの？別に気に入ったわけじゃないけど、仕方ないから最後まで見てあげるわ。」

先日、初めて俺のサーヴァントであるジャンヌと戦闘を行ったが、ぶっちゃけかなり相性がいいと思う。この黒ジャンヌ、破壊力はあるが魔力の燃費が悪い。だが、俺の魔力量は魔術師並みにあるらしい。壮大な魔力を持つマスターと最大破壊力の攻撃力を持つサーヴァント。もっと実戦経験を積めば相当なタッグになるだろう。

しかし、まったく落ち着いていられない。

それは昨日別エリアから帰って「ねえ何で16巻がないの？17巻以降はあるのに読めないじゃない、ちゃんと整理しときなさいよまったく!」

.....

「…今考え事してるからちよつと静かにしてくれ。16巻なら左の棚にあるから…。」

「あ、ホントだ。…ってあんたが整理してないからでしょ!？」

「あーはいはいわかったわかった…。」

…さて、昨日戻ってからの話だ

「お、お兄ちゃん……う？」

物置にいたのは俺の天使であり妹である小町だった。
しかし、いつもの無邪気な様子とは違う。

何かに怯えているようで、目は潤っていていつ泣き出してもおかしくない様子だ。

「小町？お前、どうしてこんなところに……？」

「お兄ちゃんも……、なんでここに……？」

お互い、まさか自分の兄妹がいるとは思っていなかった。確かにこの対戦に参加していることにも驚いたが、俺はそれよりも……

「なんでそんなに怯えてるんだよ？」

何年ぶりだろうか、妹のこんな姿を見るのは。

以前奉仕部のことで相談した時のような頼りになる姿は、今では見る影もない。

「うっ……ぐすっ……そっそれは……」

ホントに小町なのか？

そう思うほど、妹の様子は豹変している。

「……この前、カギを取りに行ったとき……、相手の人と鉢合わせて……カギ……、決戦に挑むためのトリガーのことか。確かエリア内での戦

闘は制限時間はあるが可能だったな。

「その人が、ずっと殺す殺す殺すって……。校内で見かけた人たちも、どうやって殺すかとかずっと……こんなのおかしいよ……。怖い……みんなどうしちゃったの……？怖い……怖いよお兄ちゃん……」

そう言つて小町は涙を流した。

恐らく本当の殺し合いだと思つてなかつたのだろう。小町が心優しく、争いごとなど誰よりも嫌っていることは兄である俺が一番よく知つてる。だからこそ、ここにいることに俺は疑問を抱いている。

「小町…」

こいつが泣いているのを見るのは小町が小学生の時以来か。どんなに立派でも所詮は中学生なのだ。怖いと思うのは普通のことだろう。

俺は、昔のように、妹の頭を撫でてやろうとした。

——その時だった

「そこまでにしてもらおう。」

シユン、と光り、小町の前に「白髪の男」が現れた。

身長はさほど高くないが、その凄まじいオーラ故に、巨大な何かと対立している感覚。

だが、一番危険だと思つた要因は「その男」の眼だ。

俺が誰かの目についてとやかく言うのはおかしな話だが、「その男」の眼は直視できない、出来ないほど何か力を発しているかのような、まるで眼だけで殺されそうな、そんな感覚。

そのあとすぐに、俺を守るかのようにジャンヌが俺の前に武器を構えて現れる。

男を見たとき、俺は鳥肌が立った。

こいつはヤバイ。

サーヴァントはジャンヌと「この男」しか見たことないが、こいつは恐らく別格の英霊だ。

場に立っているだけでこの存在感。

今回召喚された中で最も強いサーヴァントと言われても、俺は納得がいく。

「今までの会話と魔力の質を見る限り、お前は我がマスターの兄なのだろう。妹を慰めようとしているところ悪いが、無駄な接触はやめてもらいたい。」

「……………っ！」

ただ、会話をしているだけなのにこの威圧。

不良に絡まれた時のような安いものではない。

格の違い。

それを全身に叩き込まれているような感覚。

俺だけじゃない。ジャンヌもかなり警戒しているようだ。

「待ってランサー！お兄ちゃんは大丈夫だから。」

「小町、今は聖杯戦争中だ。例えば大事な身内だろうと、討たねばならない時が来る。ならば、これ以上余計な情を抱かないほうが身のためだ。」

どうやらこのサーヴァントのクラスはランサーのようだ。

しかし、クラスがわかったところでこいつに勝てるのか？仮に真名を暴いたとしても、対策を立てることができるのか？

ダメだ。

勝つイメージが湧いてこない…。

「八幡、ここは引いたほうがいいわ。相手もそうだけど、この時間帯に戦闘を行ったことがバレたらルール違反でペナルティを受ける可能性もあるわよ。」

俺にしか聞こえない声で、ジャンヌが助言をくれた。

たしかに、ここで戦うメリットはない。

小町のこと心配だが……

「悪かったな。お前の言う通り、これ以上妹には干渉しない。これでいいか？」

「すまない、そうしてもらえると助かる。俺とて、マスターの目の前で兄を殺したくないからな。」

「お、おう。」

あれ？ 案外話してみるといいやつなのか？ともかく、これで戦闘にならずに済みそうだ。

「…ありがとなジャンヌ。ひとまず霊体化しといてくれ。こっちに戦闘の意思がないことを見せつけておきたい。」

「…：わかった。すぐ帰るのよ？」

そういうとジャンヌはスツと消えていった。

「じゃあな小町。…：お前は、勝ち進んでくれよ…：」

「待ってお兄ちゃん!!…：お兄ちゃんも、人を殺すの？あの人たちと一緒になの？」

応えようとしたが、先ほどランサーと干渉しないように言ったばかりだから応えてもいいものなのか…

そう思いランサーのほうを見ると、察してくれたようで目を伏せ小町の後ろに下がった。

どうやら話してもいいということらしい。

「そうだな…：、一緒といわれても否定できない。でもな小町、ここに来た以上生き残るためには勝つしかない。戦うしかないんだ。参加できたってことは、小町にも願いがあるんだろ？なら勝って叶えるんだ。もう、それしか進む道はない…：。」

突き放すように、俺はそう告げた。

もう振り返らない。

それが、小町のためになるのなら、俺は嫌われてもいい。

そう決心して、俺は部屋から出ていった。

* * * * *

部屋を出てすぐ、俺の目の前に小町のサーヴァントであるランサーが現れた。

「!?……ど、どうした? まだ何かあるのか?」

恐る恐る聞いてみた。

「いや、何というわけではないが、一つ礼が言いたくてな。」

……礼?

「あの探索以来、我がマスターは言葉も発しないほど引きこもっていてな。だが兄であるお前と話したおかげだろう、心なしか顔色がよくなったようだ。ありがとう。」

……こういうサーヴァントもいるのか。

まさしく主人に仕える騎士。

全く、俺の妹は恵まれているな…

「敵である俺が言うのもおかしいが、一つ頼みがある。小町にじゃない、ランサー、お前にだ。無論聞き流してくれても構わない。」

「応えられるかどうかはわからないが、聞いただけ聞いてみよう。なんだ?」

隣に俺はいない。

突き放しはしたが、最愛の妹には変わりない。

ならば、俺が願うことは——

「……妹を、よろしく頼む。」

「……」

もう、俺が支えることはできない。

ならばせめて、誰か頼れる奴がアイツのそばにいてくれたら……

「言われずとも、我が槍にかけて、マスターを守り抜くと誓おう。」

「…ありがとう。」

こんなことはこれで最後だ。

小町のことはいつに託す。

そして俺は、自分の願望を叶えるため、人殺しになる決心をした。

もう思い残すことはない。

割り切った。トーナメント次第では妹とも戦わなければならない。だが俺は迷わない。

恐らく、迷いのある者にこの戦いは勝ち進めない。

だから切り捨てた。

いかに非情になれるか――

それが、明日から戦いに参加する俺の課題になることだろう。

「……なにいつちよ前にかっこつけてんのよ。」

ジャンヌは呆れたような顔をしながら、読んでいた漫画を置いて話しかけてきた。

「というかお前ちよつと満喫しすぎじゃね？」

「戦いの前の覚悟ってやつをしてたんだよ。心配すんな、戦いに支障はねえよ。」

「ふうん……、まあ足引つ張るようなら遠慮なく殺してあげるから安心しなさい。」

「……ちよつともう一回気合い入れ直すわ……」

遠慮なく殺す、か。

つまり、生きている今の段階では大丈夫ってことだろうか。

「昨日会った英霊、ジャンヌはどう思う？」

「……どうって？」

先ほどまで考えていた小町のサーヴァントの見解はあくまで俺の、つまり人間視点の話だ。

同じ英霊であるジャンヌがどう思ったのか、純粹に気になった。

「はあ……憶測なんて当てにならないけど、そうね……あくまで、あくまで単純な能力値や性能だけでしか言えないけど」

「そこまで言うと、ジャンヌは一呼吸いれ、再び口を開いた。

「あのオーラは確実に神性持ち。その上、立っているだけで警戒しないといけないほど身からにじみ出てる魔力値。全てのサーヴァントを確認しなくても、私たちを除けば優勝候補の一組であることは断言できるわね。」

「……………」

同じサーヴァントから見ても、やはり別格のようだ。

ジャンヌによれば神性持ち、つまり神に関する英霊ということ。能力だけ聞いていれば勝ち目はなさそうだが……

「……俺たちを除けば、か。」

「なに？変かしら？」

「いや……………」

過信しているわけではない。

自信があるわけではない。

ただ単純に——

「…俺も、そう思ってたよ。」

こいつが言葉にしてくれたことが、とても嬉しかった。

「あつそ……………。ならいいのよ。」

「おう……。」

明日から俺たちの聖杯戦争が始まる。

だが不思議と緊張はしていない。

俺は出来損ないのマスターであることは明白だ。

しかし、

ジャンヌが俺のサーヴァントである限り、

何故か負ける気はしない。

二回戦 対戦相手 ■■■

* * * * *

ここは聖杯戦争管理プログラム。

ここでは、全てのマスター・サーヴァントの監視、また戦闘の記録をしている。

セキュリティは嚴重であり、天才ハッカーでさえこのセキュリティを潜り抜けるのは不可能である。

しかし今回、稀にみる100人を超える参加者たち。

故に、制御しきれない一部のデータが漏れている。

おっと、これは一回戦を勝ち抜いた参加者のデータのようだ。

では少し、覗いてみるとしよう――

一回戦 Winner ■崎 沙■

『はあ……はあ……』

『マスター、大丈夫か？ 汝がそこまで加勢しなくても勝てたであろうに。』

『そういう油断が負けに繋がるってこともあるかもしれないでしょ？ まあ確かに、ちよつと横入りしすぎたかもね。』

『もつと私の力を信頼してもらってもいいのだぞ?』

『……信頼してるって。ちゃんと。』

『しっかし……!』

『信頼してなきや、こんな戦いに挑んだりしない。』

『……マスター……!』

『次もお願いね、ン。』

一回戦 Winner 城

『……ごめんなさい。結局はこうするしかないんだよね……』

『マスター……』

『覚悟がなかったわけじゃないの。わかってたつもりだったんだけど……やっぱり私って、最低だよね……』

『そう思えるということとは、あなたの中に人を想う心があるということ。少なくとも、最低などと、卑下することはありません。』

『ふふっ……ありがとつ。でも、やっぱり宝具は解放できなかつたね……』

『やはりまだ封印が解けないようです。条件を満たせば発動できると思うのですが……』

『……まだ思い出せない?』

『申し訳ございませんマスター……。』

『ううん、大丈夫!次も頑張ろうね、ー。』

一回戦 Winnerケ

『ふう……、何とか勝てたね……。』

『お疲れさんマスター。しっかし、意外だったな。』

『え、何が?』

『いやなに、嬢ちゃんみたいなのは、こういう殺し合いとか出来ないってイメージだったもんでよ。』

『あーうん…、しなくていいんだったら、もちろんしたくないよ?』
『ほう?』

『けど、願いが叶うなら、仕方ないかなあつて。』

『……アツハハハ!なんだおい、意外と冷酷な嬢ちゃんじゃねえか。いいねえ嫌いじゃないぜそういうのは。』

『意外だったかなあ? 私はただ、ずるい子なんだよ…。』

『なあに、気にすんなよ。泣き虫なガキよりよっぽどマシつてもんだ! 久しぶりに良いマスターを引き当てたかもなあ。』

『ありがとつ。これからよろしくね、
■ー■■■■。』

2 回戦

久しぶりの…

『対戦相手の組み合わせを掲示板にて公開しています。マスターたちは一度ご確認してください。』

普段俺の携帯はいたずらメールやチエーンメール以外では鳴らないのだが、今回はどうやらちゃんとしたメールらしい。

しかし、この文面から察するに全マスターに送信されているものなのだろうが、どうやってみんなのメールアドレスを取得したんだ？管理プログラム、恐るべし。

「へえ、対戦相手もう決まったのね。ほら八幡、早く行きましようよ。」

サーバーアントってのは召喚される際に最低限の現代の知識を得るって資料に書いてたんだが、何故こいつは人の携帯を平然と覗いてるの？お母さんそんな子に育てた覚えないわよ？

「誰があんたに育てられたつてのよ！別にいいでしょう見られて困るもんでもないんだから！」

そういやこいつとはこっちの意思とは関係なくテレパシーが発動しちゃうんだつたな。戦闘では使えそうだが、流石にオンオフがないと不便だな…

「はあ…。とりあえず見に行ってくるけど、お前はここで待機してくれよ。」

「は?!なんでよ?」

「なんでつて、もし見ただけで真名を見抜くつて能力持ったマスターかサーバーアントがいたらまずいだろ?」

「でも、校内で奇襲とかされたらあんたどうするつもりなの!?!」

「校内での戦闘はペナルティがあるんだろ?そんな易々攻撃してくるやつはいねえよ。」

「……………」

無言でこちらをじつと見るジャンヌ。

どうやら待機することに全然納得がいつていないらしい。確かにこいつが言っていることも一理ある。

しかし、情報をいかに相手に与えないかが重要な聖杯戦争において、少しでもジャンヌのことは隠しておきたいのだ。

けどまあ、今回は少しこいつの意見を尊重することにしよう。

「オーケーわかった。じゃあこうしよう。」

「……………う？」

仕方なく、俺はジャンヌに条件を出し、一人で掲示板を見に行ったのだった。

* * * * *

対戦相手公開の連絡が来てしばらく経っていたせいか、掲示板の前には随分と人が集まっていた。

久しぶりに大勢の人の中に混じったため、若干人ごみに酔ってきた。まあ時間が経てば少なくなることだろう。俺は少し、掲示板から離れたところで待つことにした。

「……………ねえ」

どこからともなく声が聞こえた。

呼びかけられた気がしたが恐らく気のせいだろう。

しっかし、まだ人が多いなあ…。そろそろ俺も確認したいんだが…

「ちよ、ちよつと！ねえつてばあ！あんたヒキタニでしょ!？」

おーい呼ばれてるぞーヒキタニ君とやら。

さつさと返事してやれよ。

「…いい加減こつち向けえ！」

「いつ!!何すんだ………って、お前……」

不意に背中を叩かれたせいで余計に痛く感じ、思わず反応してしまった。

最後まで無視するつもりだったのだが、どうやらもう無理のようだ。

というのも叩いた相手が……

「…相模、か。」

「ちつ。久しぶりねヒキタニ。」

相模南、

以前文化祭で実行委員長を勤めたやつだ。まあそのときこいつとは色々あったんだが……

しかし、呼んでおいて舌打ちとか流石に酷くね？

「で、なに？」

「いや何って、あんたまだ掲示板見てないの？」

「今来たところでこの人ごみだ。確認しようがねえよ。」

「ふうくん」

「……………」

「……………」

そして会話が途切れる。

いやそりやそうだろ。え、なに、なんでこいつ俺に話しかけてきたの？不思議を通り越して怖いんですけど……

「…………アハッ」

「アハッ？」

急にどうしてんだこいつ……アハって何？アハ体験？急に脳が活性化したの？

「アツハハハハハハハハハハ!!」

「……」

よくわからんが、相模がかなりおかしくなっていることだけはよくわかった。

何がそんなに面白いんだよ…、あつ俺の顔ですか? ってそれなら今更か…

「…ヒキタニ」

「…あ?」

「うち、一回戦の相手がゆっこだったの。もちろん殺した…生きるために殺したの。そのあと、遙も負けたことを聞いたんだ…」

「お、おう……」

なるほどな…

それで相模はちよつと狂ってるのか…

一気に友達を二人も失って、正常な方がおかしいってもんだ。

「それを聞いて私……」

「……」

「…さいつっつっつこうの気分になったの!!」

「……は?」

「今まであつた胸のつつかえが取れたっていうか、仲いい振りしてウロチヨロしてたあいづらがいなくなつてスッキリしたというか…!」

「……」
いや、依然として狂ってるのは確かなのだが…こいつホントに大丈夫なのか?

「私、やつと……やつとボツチになれた!!」

あ、やだこの子お友達になれそう。

「うち、やつと気づいたの…、これが私の願いだつたんだって。そして

今、聖杯は私の願いを叶えている…つまり、もうこの戦いの勝者は決まっているのよ！」

「それって、たまたまなんじゃねーの？」

総勢129人のトーナメント方式ということは、一回戦が終わった時点で60数人が死んでいることになる。

確率的に言えば、その中に自分の知り合いや身内が入っていてもおかしくはない。

……

……いや、今は無駄なことを考えている暇はないな…。

「うん、流石にうちもそう思ってたよ。……あんたを見るまでは」

「……………はい？」

こいつはさつきから何を言ってるんだ…？

「あんた、途中参加したんでしょ？」

「え、あ、おう。」

あれ、なんでそのことを……？

「わかってるよ、あんたが参加した理由……」

「…なんだと？」

どこからか情報が漏れたのか…？いや待て、理由ってつまりジャンヌを召喚した時に言ったことだよな。それはジャンヌにしか言っていないし、そもそもあれは正式に参加する前に言ったことだ。バレるはずがない。

根も葉もない噂や悪評を流されることはよくあることだ。

だが、俺が聖杯戦争に参加した理由なんて聞いて誰が得をするというんだ？

俺にとって何の弱みにもならないし、相手にとって何の武器にもならない。

なら、相模が言っている理由とはなんだ？

「……………うちのため、なんだよね。」

「……………は？」

……………は？…え？

今こいつは何と聞いた？

「わかってる、わかってるよ。うちのためにわざわざ参加してくれたんだよね。」

「いや……………え？」

予想外の答えに頭が追い付かない。

俺が、

相模のために、

聖杯戦争に、

参加した、だと？

「待て、なんでそうなる？」

当然の疑問を自然に聞いてみる。

「何でって、私に殺されにわざわざ参加してくれたんだよね。」

「……………」

依然理解できなかった。

「私、トーナメント表を見たときとても残念だったの……………なんでヒキタニがいないんだろうって…。私はボツチになりたいのに、私に関わったことのある人全員殺したいのに、なんでって…」

しょんぼりとした表情とは裏腹に、何やら急に物騒なことを語り始めた。

「そう思ってたなら、あんたが急に参加することになったって知って！これって私の願いが叶ったってことだよね！聖杯が私の願望を叶えたってことだよね！つまり、この聖杯戦争はもう私が勝ったも同然ってことじゃん！もう最高だよ、アハハハハハ！」

………

納得はしてないが、ぼんやりとこいつの言ってることはわかった。つまり、俺が参加したことで自分がもう優勝したも同然と思いつているのか。

…何ともまあ、中二病顔負けの想像力だな……

——ねえ、八幡

唐突に、声が聞こえた。声の主はもちろん…

(…どうした、ジャンヌ)

部屋を出る前にジャンヌに出した条件、それは俺とテレパシーできるギリギリの距離まで離れ、できる限りマイルーム付近で霊体化した状態で待機している、というものだ。

——あいつ、燃やしてもいい？ていうか燃やすわ。

(ジャンヌ、ステイだ。)

ちゃんということ聞いてくれるのは助かるのだが、基本考えが攻撃的なのが厄介だ。

まあ、俺のことを守ろうとしていることはホントに助かっているのだが…

(これも一種の作戦かもしれん。相手に流されたらそれこそ向こうの思う壺だぞ。)

——チツ：わかったわよ。

…声が完全に聞こえなくなった。どうやら納得してくれたようだ。まあ何というか、何だかんだいいやつなんだよなあ

「じゃあヒキタニ、この一週間、存分に楽しもうね！うち、精一杯あんたを殺しに行くから！簡単に死なないでね……うふふつ、アハハ！」
そう言って、相模は去って行った。

…なるほど、小町の気持ちがよくわかってきた。

どんな願いも叶える願望機を前に、みんなが必死で相手を殺そうとする。普通ならこの殺気にやられてしまうのだろう。

「……はっ」

だが、俺にとってはむしろ清々しい思いだ。

誰が向けてきたのかわからない悪意よりも、

目の前から、ちゃんと敵意を向けてくれた方が俄然楽というものだ。

そんなこんなで、掲示板から人がほとんどいなくなっていた。

まあ、あのセリフからもう察しはついているのだが、念のため確認する。

「…はあ…、めんどくせえな……」

* * * * *

対戦相手を確認した後、俺は購買部に寄った。

一応言うことを聞いてくれたジャンヌに何か買って帰ってやろうと思ったからだ。

しかし、高校の購買部にある商品などたかが知れている。

通常とは違う状態らしいが、仮にもあいつはフランスの聖女様。

せめて、上等なお菓子でもあればいいんだが……

そんな淡い希望も虚しく、購買部にはないことを確認した俺は何も買わず、少し校内を歩くことにした。

別に、目的の場所があるわけではない。

ただ、上等なお菓子、のことを考えたとき、

いつも一番初めに部室にいる、アイツのことを思い出した。

「……いやいや、バカか俺は」

自然と、部室の前に俺は立っていた。

今となつては、ここは別エリアへ行く入り口でしかない。

もちろんここにアイツはいない。

そんなことはわかっている。

わかっているのに……

何故か、俺の足が止まった。

……

……

……なんだ、この匂いは…？

もちろん部室からではない。

これは……隣の部屋…？

小町がいるであろう物置とは少し離れた部屋だ。

いや、そんなことはどうでもいい。

問題なのはこの匂いだ。

いや、匂いというより……

この香りは……

「……紅茶……」

種類は詳しく知っているわけではない。

だが、こればかりは間違えるはずがない。

何故ならこの香りは、いつも部室で漂っていたものだ。

「……これは確認だ、何も問題ない……」

そう言い聞かせるように言った後、俺は、香りが漂う部屋の扉を開けた。

そしてそこには……

「……ん？やあ。えつと……君は……」

「……………」

見知らぬ一人のイケメンがいた。

「…あ、いや、す、すまん。いいにお…香りがしたもんだからつい…」

自分でも驚くほど元気がなくなっていた。

え、なにこれ、めちやくちや恥ずかしいんですけど…

確認とか言っておいて内心めちやくちや期待してたってことじゃないか…。これはあれだな、あいつにだけは死んでも隠しておかないとな。

「ふふっ、なるほどね。そうだ、よかったら一緒に君もどうだい？僕のパートナーはこういうものがどうも苦手なようでね、知らずに作りすぎて困っていたんだよ。」

部屋に元々いた男は、笑顔で俺に語り掛けてくる。

「つつてもなあ……………」

そう、今は戦争中なのだ。

このお菓子や紅茶に毒が入っている可能性もある。こんなことで脱落していたら溜まったものじゃない。

「あ…そうか、確かに見知らぬ人からのものなんてそう簡単に食べられないね…。」

素なのかわぎとなのか、見てわかるくらい男はしょんぼりしていた。

だが、こればかりは仕方がない。

仕方がない、のだが…………

「…………その紅茶…」

「…え？」

「いや、その紅茶は、あんたが作ったやつなのか？」

「ああ、この紅茶？僕が作った…といってもここにあつたティーセットを使わせてもらったんだけどね。」

「…ここにあつた…」

もちろん、この男が嘘をついている可能性もある。むしろ思ったほうが自然だろう。

しかし、俺は先ほどから漂っているこの香りのことを信じずにはいられなかった。

「…一杯だけ…」

「…？」

「一杯だけでもらつてもいいか？その紅茶。」

「…いいのかい？」

「ああ。いや、むしろ飲ませてくれ。さつきから気になってしょうがないんだ。」

「あ、ああ…もちろん、すぐ用意するよ。」

そう言つて、男は嬉しそうに用意をし始める。

どうやら、俺は相当あの紅茶にはまってしまったらしい。

これで、毒でも入っていれば死ぬというのに、ダメだな…

「どうぞ、口に合えばいいんだけどね。」

合うちに決まっている。

根拠などどこにもないが、直感的にそう思った。

スツと紅茶を口に含める。

「……美味しい…」

これ以外の言葉が出なかった。

久しぶりの味だ。

不思議と心が落ち着くようだった。

「そうか、それは良かったよ。」

男は嬉しそうに笑みを浮かべる。

「それでその、聞いていいのかわからんが、」

「ん？なにかな？」

「…名前、とか、聞いてもいいか？」

「…名前、か……」

少なくとも、俺のクラスにはこの男はいなかった……と思う。

そもそも、これほど美形の男がいたら以前から噂になっていたはずだ。

「……シン」

「え？」

「名前だよ。僕はシン、ただのシンだよ。」

「シン、か。」

もちろんこれが偽名という可能性もあるが、初対面である以上確証がない時点では疑っていてもしょうがない。

「俺は比企谷だ。……まあなんだ、紅茶サンキューな。」

「いや、僕のほうこそありがとう。やっぱり、ティータイムは誰かと一緒にしないかね。」

この時の俺はまだ知らない。

シンと名乗ったこの男が、

俺の初めての友達になるということ